

〔平成26年度明専スクール〕10/11(土)、11/1(土)・11/2(日)開催

明専スクールで次につなげる

工学研究院電気電子工学研究系教授 白土 竜一(電59)



本学を卒業し、社会に出る人は、リーダーになることを確実に要求されます。しかし、そのことに気づいている学生は少ないのが現状です。

「明専スクールへの参加者を募集します。」とアナウンスしても、主催者側が思っているような人はうまく集まりません。たぶん、先生に言われ、断ることができなくて、渋々、参加しているのかもしれないですね。

さて、学生の就職活動が始まる秋になるとよく、週刊誌などに有力企業就職率なるものが掲載されます。

本学は、毎年、全国10位ぐらいのポジションにあり、卒業生の3人に1人は、そうした企業人として巣立っています。たぶん自分の学生時代と比

べたら、その率は激減しているのですが、いまだに多くの有力製造業を中心に、本学の学生を積極的に採用する動きは健在です。このことは、学生の就職の面倒をみている者として、とてもありがたいことです。ところで企業がどのように本学の学生を採用したくなる源泉はどこにあるのでしょうか？ 企業から離れて長い時が経過したので、自分が企業に在籍していたころを思い出しながら考えてみたいと思います。

自分が九州工大を卒業し、関西の某大手ガラス会社に就職したところ、先輩方は、技術系トップを筆頭に、会社の技術の中核を担われている方ばかりでした。会社の中の大学別の人数では、阪大、京大、九州工大の順だと聞かされました。新入社員の自分のために、部長級の先輩が声をかけ、実習工場と配属先の研究所で歓迎会が開かれたことをおぼえています。新入社員の中で出身大学の歓迎会があるのは九州工大だけでした。さらに、仕事上では、隣のチームの

主任の先輩が私の働き方に目を光らし、何かあれば、さりげないヒントをくれました。「なに、ちまちま、値をふってるんだ。」その一言で、大局的に問題をとらえる必要性に気づかされ、それが課題の解決と新たな展開につながり、壁を抜けることができました。そして、周りから一歩抜きん出る成果を出すことに成功します。

おそらく、九州工大の卒業生の多くは、このように後輩を育てていることだと思えます。自分がしてもらった恩は、自分の後輩にも同じように伝えていく。その積み重ねの一つ一つが、学科を超え、企業の枠を超えた結束と成果を生みだします。

「九州工大の卒業生は仕事ができるし、使い勝手もいい」との評価が、企業の人事に浸透し、理系では、旧帝大に匹敵する企業内評価を得ているようです。

ということは、本学の卒業生は、社会に出れば、その選抜されたエリート集団の中で技術者として生き、年齢とともに、その組織にとどまるためにはリーダーシップを取らなければならぬ宿命にあるのです。冒頭で述べたように、在学生はその事実をほとんど知らないのが実状です。



写真1 グループ討議で活発に議論するスクール生



写真2 明専スクールの講義内容や運営方法について打ち合わせる各パートの主担当者会議のようす

本学を卒業し企業人となった瞬間から、自分の将来に、待ち受けている壁の高さに圧倒されてしまうかもしれません。それをうまく乗り越えるには、学生時代の多様な経験がとても重要だと思っています。

明専スクールでは、内定先でリーダーシップを必要とする学生を各学科より推薦してもらっています。そこで、入社後にこうした現実直面したときに、臆することなく対処できる経験を事前に体験できるカリキュラムを準備しています。たとえば、グループ討議の中で、学生は、リーダーやその協力者の役割をはたす時に、どういう風にすればベストなパフォーマンスが得られるのかを実践の中から学びます（写真1）。

出張報告書の作成では、まるで上司のごとく各班担当の先輩が、10月開催の1日目のスクールを出張とみなし各自作成した報告書を添削し、メールのやりとりで指導。1泊研修時には例を示しながら講評も行います。さらに社会人としての基本的なマナー、必要な知識と考え方を懇切丁寧に教える盛りだくさんの内容がらなっています。したがって、限られた時間の中で、効率よくスクール生に必要なことを伝えるため、講義

内容の見直しも含め、事前の担当者打合わせを何度も綿密に行っています（写真2）。

スクール修了生の事後アンケートの中に、グループを指導する先輩や講師の所属企業に就職する学生のみを対象にスクール生を募集して欲しいとの意見がありました。私は、それは逆だと思っています。スクールの講師などをされている企業は、本学のことを社内の方も熟知した企業なので十分なケアがなされていると思います。だから、卒業生が少なかつたり、社内明専会の活動が活発でない企業に就職をされる方にこそ、本スクールの受講をお勧めします。それは、身近に気さくに頼ることができ先輩がいらない可能性があり、自分の力のみで頼る社会人のスタートは厳しいと思うからです。

更に欲を言えば、本スクール修了生は、スクールで得られた知識を日頃の研究室の運営において実践してみるのはどうでしょう。研究室のパフォーマンスをあげるために、教授のもとで中間管理職としてどのような動きをしたらいいのか、参加できなかった同僚を巻き込み実践してみる。さらに、学科やコースの核となり、より多くの学生の集団をまとめ

て、さまざまなイベントを企画する人ができれば最高です。

今、学生のみなさんに求められているのは、グローバルに活躍できる社会人としての基礎力と人の上に立ち物事を俯瞰的に見ることができると人だと思っています。周りの人のために自分の力を出してみる勇氣と、そのことから生まれるプレッシャーに耐える力は、失敗が許される学生時代の多様な経験の中で育まれるものだと思います。明専スクールで学んだことを、周囲を巻き込みながら展開することにより大学内の活性化につなげ、将来、企業内でリーダーとなっていく。明専スクールを修了した学生が、次の世代の学生に、その伝統

と意識をつなげていく核になればと思っています。

その芽は、もう芽生えつつあります。スクール修了生の企画で、卒業前に講師などを含めた交流会の計画が進んでいます（写真1中央の学生が幹事）。12月に学内で開催された就職活動報告会では発表者3名全員、修了生でした（写真3）。スクール1期生が2年続けて明専女子塾の講師の1人として選ばれ、在校生に企業での活動を伝えていきます（写真4）。「将来有望！」私にはついぞかからなかった先輩方からのあの定番のかけ声が、スクール修了生には良く似合います。

写真3 報告会の発表者は全員スクール4期生



写真4 明専女子塾にスクール1期生の姿がありました